

牧師室から (2022.4.10)

今年に入って、夫の実家がある船橋まで週1回通うのが習慣となった。仕事の都合によって変わるが、大抵火曜日に行き、木曜日まで私たち二人のどちらかの一人が両親のところ泊まっている。鈴木牧師一人で行くときは電車で行くが、私が行くときはワンちゃんメグも同行することになり、車での通いになる。メグは実家の庭が大好きで、それに犬好きな両親の世話もあり、荷物を積んで車に乗ると、実家に行くのが分かるようでメグの喜びが伝わってくる。メールでのやり取りやある程度の仕事は実家でも可能であるが、祈祷会は一人だけの出席になるので、海老名教会の皆様には迷惑をかけている。義父の病と義母の体の弱さを理解してくださるので、私たちが甘えている状態で、教会の皆様には本当に申し訳ない気持ちである。

義父は1月に余命6ヶ月と医者から宣告され、一時ショックを受けたようだが、義母の勧めで受洗し、今は食卓での祈りもできるようになった。痛み止めの薬で変わらない平穏な生活ではあるが、いつどうなるかは分からない状態である。週ごとの医者と看護師の訪問は、本人はもちろん家族である私たちにも安心感を与えてくれている。

3月に深刻な病状が出て心配していたが、4月に入ってから調子よくなり、義父はこのままなら、2、3年は生きるのではないかと冗談のように言っている。牧師として、いろいろな方の人生の最期の様子を見てきた私たちとしては、義父の明るい姿が驚くほどだが、義母の話では、87歳まで生かされたから大丈夫と言いながらも、小さなことに神経質になったり、私たちがいない時は落ち込んだりしているようである。しかし、私たちに会うと、自分の体より、私たちの体と子どもがいない私たち二人の老後が心配のようだ。共に年を取っていくような年齢であっても、いつまでも親は親だという当たり前の話を実感する。

「死ぬ」ということは誰もが通らなければならない、私たち人間においては大きな関門であることをつくづく思わされる。同時に、両親の姿を見ながら、自分自身の死の迎え方についていろいろ考えさせられている。

死が近づいていても、食卓を囲んで笑い合いながら、天国についての話し合いができることに、神様の不思議な恵みを感じる。心が温まる時間に感謝しながら、今、この世に存在していることの大事さが身に染みる。

(鈴木善姫牧師)